

会津藩における「御看抱」について  
―幕藩制における「後見政治」の一形態―

守屋 浩 光

目次

はじめに 「御看抱」ということばについて

一 「御看抱」の始まりと終わり

I 「御看抱」以前

II 「御看抱」の依頼

III 「御看抱」の終了

二 「御看抱」の内容

I 「御看抱」についての一般ルール

II 「御看抱」の具体例

三 「御看抱」に関する問題点

I 「御看抱之御方」と保科家

II 「御看抱」の助言と幕藩関係

III 「御看抱」と「御頼」・「両敬」

IV 「御看抱」の特殊性

四 まとめ

I 「御看抱」の意義

II 「御看抱」と「御添心」

はじめに——「御看抱」ということばについて——

近世における大名領の政治は、「自分仕置」という言葉に表されるように、大名や、大名家臣たちの自律的な政策判断のもとで行われるのが建前であった。しかし、幕府は全国法令の遵守を強制したのはもちろん、様々な形での大名統制策を通じて、藩政をコントロールした。<sup>(1)</sup>藩の側は、幕府の諸機関に対する問い合わせや、藩相互の情報交換を通じて、幕府の行政上の先例等を知ろうとした。自藩の政策定立の際、幕府の態度をあらかじめ知っておく方が安全であると考えたためである。また、藩主は、徳川将軍に対するさまざまな儀礼を、とどこおりなくこなすことが求められた。とくに幼少の藩主の時期においては、幕府重職との連絡を充分にとつて行う必要があった。

今回紹介する保科（後に松平姓となる）氏支配期の会津藩は、徳川一門である一方で、寛永末から寛文期前半にかけて藩主であった保科正之のキャラクターや、寛政期における明律を参考にした「刑則」の制定など、独自色の目立つ藩である。だが、新藩主が幼少の身で藩領を相続した直後を中心として、幕府の中で重要な地位を占める幕閣数人に対し、藩政に対する助言をしてくれるよう、あらかじめ依頼しておくことが行われていた。そして、実際に政策判断の場において、彼らに助言を求めることがあった。

ところで、『会津藩家世実紀』では、この現象および担い手を、「看抱」という言葉を用いて表している。われわれにとつてあまりなじみのない言葉であるが、<sup>(2)</sup>いくつかの用例からみて、「後見」とおおよそ同義に使われていると考えられる。<sup>(3)</sup>

そこで、会津藩の幼少藩主期における、特定の幕府役職者による一連の助言行為を「御看抱」、その担い手となる幕府役職者を「御看抱之御方」と定義し、考察を進めることにする。

(1) ただ、幕府の天下支配と藩の自分仕置とは、少なくとも実態として二律背反的なものではなく、相互補完的に行使されるものであった。幕府は、合理性を欠く政策を強行することは極力控え、藩側の理解を得ながら展開しようとする傾向があった。

(2) 近世史研究者の間でも、「看抱」という言葉は、「後見」と同義であると漠然と意識されるにとどまっているようである。『邦訳日葡辞書』には、Canbo（看坊）という項目があり、「ある寺の世話をする坊主」という記述が出てくる。これは本稿には関係しない。他の国語辞典等に「看抱」の項目はない。また、管見の限り、近世文書で「看抱」という言葉の出てくるものはあまり多くない。

(3) 「御看抱」という言葉は、すくなくとも大名に関する場面では、あまり見られない。庶民の場合で後見的な役割を指すものとしては、一七二四（享保九）年四月九日の「江戸幕府日記」に、「看抱」という言葉が使われているのを見ることができる。

一左之通申渡之

浪人

町野伊兵衛

町野惣右衛門遺状二栄寿院と町野惣八郎通路無之様二と有之候得とも、右遺状二永寿院江遺金をも致配当候様二との事二候得共、不通二而者無之候処、不都合之遺状を申募、且惣八郎を致看抱候内、自分として奮惣八郎を蔑にいたし、剰

小石川伝通院前町屋式鋪ハ惣右衛門先妻二貫候由、証拠も無之候処、自分之屋敷と申金子借候節、手形二書入之和泉屋平左衛門名所江伊兵衛下人之判押之、畢竟今謀判之処、彼是申紛し、且又惣右衛門実父より譲置候田畑作徳之儀も、惣右衛門死後惣八郎方江少も遣不申、何方江も不相断、自分江收納之、且惣右衛門死後、勘定負請金等自分江引請、皆済仕候旨離申之、吟味之上、申分不相立、重々不屈二候、依之遠島申付もの也

右於評定所町奉行諏訪美濃守御目付稲垣求馬立合美濃守申渡之（国立公文書館内閣文庫所蔵『江戸幕府日記』享保九年四月九日。なお傍点は筆者）

また、商家の文書において、後見的な役割を果たす者を「看坊」と称しているものもある。（京都大学法学部日本法制史研究室所管史料「和談一札」文政四年）

## 一 「御看抱」の始まりと終わり

### Ⅰ 「御看抱」以前

一六七二（寛文十二）年十二月、保科正之が死去する。翌年の延宝元年三月十六日には、將軍の上意として、領内の政治について必要な場合、大老酒井雅楽頭忠清に「御頼被成」るようにと、幕府から会津藩に伝えられた。同月十九日、老中稲葉美濃守正則から「雅楽頭殿へ御用之儀候ハ、丹後守（稲葉丹後守正往）を以被仰入可然候」と申し渡された。それ以来、藩政組織の人事に関係して、正往に相談している事例がみられる。直接に酒井忠清に相談しているケースはなく、藩政に関する相談事は、専ら正往が相手である。対幕府、對他大名関係の事柄については、正往のほか、稲葉正則にも相談している。

## II 「御看抱」の依頼

『家世実紀』のうえで、最初に「御看抱」が登場するのは、一六八一（天和元）年、藩主正経が死去し、幼少の正容が遺領を相続したのちのことである。

### （史料一）

「稲葉丹後守様京都御所司代被蒙仰候二付、御看抱之儀堀田筑前守様へ被成御頼、」

丹後守様此度京都御所司代被蒙仰候二付、御家御用向之儀、是迄公儀向并此方諸用、近年丹後守様へ伺候を以、御家中致安堵し、殿様末幼年二候得者、彌丹後守様御助言奉願候処、御上京之御事此方御為二者不宜候、・・・兼而御家御用向之儀、丹後守様彼是御苦勞被成、御老中堀田筑前守様被成御頼候を以、御用可被聞召旨、御挨拶被仰遣候・・・（『会津藩家世実紀』天和元年十二月四日）

近年、稲葉正往に「公儀向并此方諸用」について相談していることがわかる。それが、今度正往が京都所司代になることにより、老中である堀田正俊に、今まで正往が担っていた役割を依頼することになったというものである。ただし実際には、後述するように、その後にも稲葉正往に相談している例がある。彼に加えて、堀田正俊にも相談するようになり、この時点から、二人が「御看抱」として把握されるようになった、と理解するようになったというのが正確であろう。

この時点において、「御看抱」という言葉は、助言行為を表す言葉として用いられているが、翌日の記事には、「御看抱」という言葉が助言を依頼する相手を指す言葉として出てくる。

## 説

## (史料二)

## 論

宜山様御在世之内、御家来・御加増等之義、御家老共評議一決之上不申上義二而も、從上被仰出候義杯も在之候を以、此度御代替わり二付 殿様御心得之儀、丹後守様墳御直二御教諭被成進度由、丹後守様へ茂右衛門内々申上候条々、(略) 以来御看抱堀田筑前守様江も、何様之品々可申付も難計候間、奉行共をも引加へ、諸事僉議之上奉伺候様、前件之趣御勘弁被遊、柳瀬三左右衛門・保科民部へ、堅被仰付被下度旨、(以下略) (『家世実紀』天和元年十二月五日) これは、家老伊深茂右衛門が、年寄の評議一決の事項でないことを藩主正容が承引しないように諭してくれるよう、稲葉正往に内々に頼んだという記事である。また、一六八三(天保三)年正月には、老中阿部正武にも「御看抱」を依頼している。

## (史料三)

豊後守様ハ御老中御勤役と申、且ハ去年中御息女お竹様御縁談被蒙仰御親敷御方に有之、依而是以前より御看抱御用御大老堀田筑前守様江御頼被置候処、筑前守様思召候者御縁組相済今程者御間柄之事候間、豊後守様へ御用御頼み被成候様二稲葉丹後守様へ御談有之、此段丹後守様墳御直書を以替り思召も無之由被仰越候二付、伊深茂右衛門・柳瀬三左衛門御使者二而、阿部豊後守様へ御頼被仰入候処、悉御領掌二候間、此已来御家政之御用御相談被成、尤筑前守様二も是迄之通御用之義等凡而御談被成候、(『家世実紀』天和元年正月)

これ以前藩主の相続事例においては、「御看抱」という言葉で、幕閣にさまざまな助言を求める旨、あらかじめ約束しているような事例はみられない。『家世実紀』の編纂者は、正容が遺領を相続する時点になって、藩政に関する助言を求める体制が始まった、と考えている。また、この時点から、助言行為や助言をもらう幕閣のことを「御看抱」

と呼んでいる。

次に「御看抱」の依頼の事例がみられるのは、一七三二（享保十六）年、正容が死去、容貞が遺領を相続したときのことである。

（史料四）

御幼年中御用向御看抱之義、御家老共申談、栄光院様入御耳、豊後守様（筆者注Ⅱ元老中阿部正喬）・豊前守様（奏者番兼寺社奉行黒田直邦）へ御頼被成可然と一決之上、御遺命之趣を以御頼之御使井深茂右衛門相勤候、豊後守様ハ此節御在所二被成御座候故、豊前守様御一人御招待、猶又厚く御頼有之候処、豊前守様被附御氣加様之時者御続之訳ケも有之候間、佐渡殿（奏者番兼寺社奉行稲葉正親）へも御出を願候而可然、諸事被并候方二候得者、何を問合候而も丈夫成義二候、外之方御出候而も初心二而ハ何事も不行届、佐渡殿二候得者相談も別而宜相調被被仰候を以、俄二佐渡守様江も茂右衛門を以御頼被仰入候処早速御許容被成、御由緒有之義二候得者、少も御如在なく何時二而も御用可承、心底残候所存者少も無之由品々御懇之御挨拶有之、何れも無滞御頼相済候、（『家世実紀』享保十六年九月廿九日）

これは、死去した正容の遺命により、阿部正喬、稲葉正親、黒田直邦の三名に「御看抱」を依頼したという記事である。

Ⅲ 「御看抱」の終了

「御看抱」関係は、藩主が幼少である時期における、特殊なものである。よって藩主が成長したと判断された時点

において、当然に消滅することになる。

天和期の「御看抱之御方」は、前述の通り、稲葉正往、堀田正俊、阿部正武の三名である。このうち、堀田正俊は、一六八四（貞享元）年八月、若年寄稲葉正休に暗殺されている。彼は、阿部正武が「御看抱之御方」に加わる際に、その中心的役割を退いているが、その後もお、会津藩からの諮問に対し、助言を行っていた。稲葉正往は、一六八一（天和元）年末、京都所司代となり、京都に赴くために、第一線から離れる。三人目の阿部正武であるが、彼が「御看抱之御方」を辞めるという事実は、特に発見できない。しかし、一六八六（貞享三）年までには、彼に助言を求めたという記録はなくなっている。「御看抱様」という言葉がでてくるのは、一六八四（貞享元）年十月十日の刑事裁判に関する事例が最後である。また、藩主保科正容は、翌一六八七（貞享四）年の東山天皇の即位の時には、京都に赴いて、將軍の使いをつとめている（当時二十歳）。「御看抱」関係のもとにおける、有力幕閣の藩政に対する助言は、一六八四（貞享元）年から一六八六（貞享三）年の間に消滅したと考えられる。

享保年間の看抱関係については、「御看抱之御方」の死亡または、辞退によって終了の時点が比較的容易に確定できる。稲葉正親は、一七三四（享保十九）年九月大坂で死去、黒田直邦は、一七三五（享保二十）年三月に死去している。残った阿部正喬も、一七四二（寛保二）年六月、「御看抱」を辞退した。阿部正喬が「御看抱」を辞した理由は、

（史料五）

肥後守殿御健勝段々御年も被為長、（以下略）（『家世実紀』寛保二年六月十九日）

豊後守様被仰候者、次第二年来二罷成、氣力衰候二付、御用向承候儀無覺束存候、（以下略）（『家世実紀』元文五年



十二月)

とあるように、藩主容貞の成長と自身の衰えであり、元文の末頃から再三にわたり、辞退の申入をしている。しかし、会津藩側からすると、まだ「御看抱」関係を終了させることには不安があったらしく、会津藩からは、事柄によっては相談に乗ってくれるよう、なおも依頼されている。実際に阿部正喬への助言依頼は、一七四五（延享二）年頃まで続く。また、同年、正容の八男容章（靱負佐）が、將軍吉宗に御目見をはたし、任官する。助言依頼がそれ以降になったことと、容章の任官が関係があるのかどうかは、明らかではない。

（1）また、一六七一（天和元）年七月、南山蔵入領の強盗三人（討ち留められる）の死骸を磔、あるいは獄門に処することの当否に付き、稲葉正往に相談をしている事例がある。『家世実紀』第三卷五六頁以下。

## 二 「御看抱」の内容

### 一 「御看抱」についての一般ルール

『家世実紀』の編纂者が「御看抱」という言葉を、はじめて使った時点より前、すなわち専ら稲葉正往が「御家御用向」について相談にのっていた時期には、特別に依頼のルールは決めていなかった。藩の重職者は、堀田正俊が「御看抱之御方」に加わってから、どういう事柄について助言を求めるかという問題意識を持ちはじめたようである。享保期の「御看抱」においては、たとえば藩政機構の人事については、大目付、御旗奉行以上、および町奉行、郡奉行、

公事奉行の裁判担当三役の人事の場合、「御看抱様」に「撰寄書を入御覧」れ、それ以外の者については、選任したことを通知するにとどめる、というように、具体的なルールが決められている。<sup>①</sup>

## II 「御看抱」の具体例

それでは、「御看抱」の名の下に、どういったことについて助言が求められたのだろうか。依頼事項は「公儀向」と「御内証向」に分けられる。ここでは「御内証向」の事項について、その具体例を紹介する。<sup>②</sup>

「御内証向」についての依頼事項の一つの柱は、藩政機構内の人事であった。その最初は、一六八二（天和二）年二月二十七日、諸役の選任に当たつての基本方針を家老柳瀬三左衛門および保科民部に教諭したときである。

### （史料六）

柳瀬三左衛門・保科民部義、御用為可伺筑前守様へ罷出候節、役人撰之義肝要之事二候間可入念候、不依知行之高下其役二当候者撰候而可然旨被仰聞候（以下略）（『家世実紀』）

「御内証向」「御看抱」依頼事項の、もう一つの大きな柱は、「罰事」であった。領内の刑事事件の処理について、幕府の先例を調べるべきとされた場合においても、「御看抱」に対する助言依頼という形が取られた。依頼対象の事件は、他領追払刑以上の事件であつたと思われる。<sup>③</sup>

### （史料七）

奥三郎儀吉田織之丞之郷中間二而、去年江戸に罷上候処、其年六月九日金子壱両三分銭九百文致取逃方々致流浪候得共及飢候故、無為方同十九日三田御屋敷御門前二致徘徊候処を召捕、押込へ入置、江戸詰合加判之者共稲葉丹後守様

二相伺候ハ、会津郷中間勤番之者召連候処、度々致取逃候、前々加様之者在所へ立帰り候得者、詮議之上取逃之品々返金等為相済、牢舎之日数を以致赦免来候処、兎角死罪二不被行と存候哉、毎度加様之儀有之候、如何可申付と伺候処、勤番二而登候者二事を為欠候上取逃候段重科二候、公儀二而も取逃し欠落之類死罪二被行候、下々心入悪敷成、左様有之候と相見候間、取逃し候者立帰候歟或者捕候ハ、死罪申付候用被仰聞候二付、達御耳候処誅伐可申付旨被仰出之、奥三郎を会津へ被差下候二付、加判之者共先牢舎申付、江戸へ申遣候ハ、前々取逃之者在所へ立帰候得ハ、取逃之品二返金等為相済牢舎日数を以致赦免来候由、丹後守様江申上候由二候得共、左様之義無之、伊勢参宮之類又ハ欠落一篇之者立帰候得者、牢舎日数を以致赦免申付、取逃之者立帰候へハ牢舎まで二者無之、其咎之轻重二寄僉議之上追放刑罪申付事二候、且又公儀二而も取逃欠落之類死罪二被行候と丹後守様被仰候由二候得者、欠落一篇之立帰二而も向後者死罪二被仰付候義二も候哉、左候ハ、其段兼而地下之者二も為知置ため二候間、委細可申越候、世上渡り奉公人等二候ハ、申付厳科之方二も可有之候得共、会津民間之義二候得者、仕置同様二は有之間敷事二候哉、可有其心得旨申遣候、然処奥三郎義致牢死候二付、及言上戸首獄門二懸之、(『家世実紀』天和二年三月十六日)

これは、藩士の間であつた者が横領の上欠落した事例について、その後立ち帰つた者を幕府ではどのように取り扱っているかを、稲葉正往に問い合わせたという事件である。これに対し、伊勢参拝や欠落だけで単に立ち帰つただけの者はともかく、勤番で江戸に登ってきている者が横領、欠落することは重科であり、公儀においても死罪に行われており、この事例でも死罪に処すべきである旨回答している。もう一つ、刑事裁判に関連して、具体的な事例を紹介する。

## (史料八)

最上寒河江町権兵衛儀、天寧寺町甚三郎と申合致所々致盜候二付、御代官衆へ御懸合之上誅伐梟首。三人共二誅伐梟首可然加判之者共致言上候処、柳瀬三左衛門を以堀田筑前守様へ御伺被成候得者、御領地之者ハ格別権兵衛者其所之御代官衆へ御届被成可然由被仰越候二付、(略)、当領之者二候得ハ誅伐申付儀二候へ共、其元御領之者二候故御断申候様子被仰越次第相渡可申候、(略)寒河江町代官松平清三郎殿へ被仰断候故、(略)御断之趣御勘定奉行衆へ申達候、御蔵領之者二候得共致盜悪人之事二候間、同類一同所之御仕置被仰付候様二と挨拶有之候二付、権兵衛・甚三郎始連座之者共夫々御仕置被仰付、次郎助者従是先致牢死候二付、夫迄二被成置候(『家世実紀』天和二年六月二十五日)

最上寒河江町(幕府領)の者が会津領内において、窃盜をはたらいた事件について、会津藩から堀田正俊に対して、どのように処置すべきかの伺いがたてられた。これに対し堀田は「御領地之者ハ格別権兵衛者其所之御代官衆へ御届被成可然由被仰越候」と回答した。会津藩ではこれに従い、寒河江代官松平清三郎へ断つたうえ、その旨を勘定奉行に通報した。勘定奉行からは、「御蔵領之者二候得共致盜悪人之事二候間、同類一同所之御仕置被仰付候様二と挨拶」があり、幕領の者も含めて会津の裁判で処断されている。実際の取り扱いで「他領他支配人別の者が関わる事件については、幕府が裁判管轄権を持つ」という江戸時代の建前を逸脱する場合においても、当時の大老であった堀田正俊に伺いをたてていることがわかる。<sup>(4)</sup>

領内における刑事事件の処理については、一六八二(天保二)年六月のものがある。これは殺人を犯した藩士を、組頭、奏者番など九人がかくまい、そのうえその藩士を殺害して、死骸を捨て置いたというもので、僉議が難航し、当時江戸にいた藩主正容の耳に入れたところ、「堀田筑前守様へ被仰進御差図」があった。助言を求める際、正俊の

もとは、

(史料九)

如此九人之批判(被疑者の量刑案のこと)相認、外二印符之書付を添、惣而帳面十冊書付忝通助右衛門并同役広川喜右衛門二相渡候二付、兩人同廿三日会津出起、同廿六日致参府、詰合加判之者共吟味之上達御耳穿鑿之帳面書法之違等調直シ、外二穿鑿之抜書并覺書何れも帳面に相調、五月十二日筑前守様へ柳瀬三左衛門・保科民部持参差上之、ということ、捜査記録を送っている。その後、五月二十五日に、

(史料十)

助右衛門・喜右衛門を被召呼、筑前守様御直二御尋、其後忝人つゝ被召出被為聞、同廿七日三左衛門・民部再び罷上り候処被召出、穿鑿帳逐一御覧之上御仕置方之儀被仰含候

九人の処分について助言したようである。その際、審理に当たった目付芝助右衛門・広川喜右衛門を一人づつ呼んで質問し、さらに家老柳瀬三左衛門・保科民部を呼んで、捜査記録に目を通した上で助言しているのが分かる。刑事事件、しかも比較的上層の家臣が被疑者になったという、特殊な事案という限定はつくものの、「御看抱」堀田正俊は、領内の刑事事件について、家老をはじめとする「加判之者」が持っているのと同様の情報を得たうえで、助言を行ったといえる。

(1) 御看抱御用御頼被成二付而ハ、御家老とも夫々之御用向相伺候義二而、其内御役替之事ハ重立候義と申、御家訓ニも選士不可取便僻便佞者と御記被成、御選舉を被為重候思召顯然二候、依而ハ此義を御看抱様へ相伺候ニも、其稟性御存知

可被成様無之候得者、何二も其取行重く被成置候方可然、元来黒田豊前守様へ御看抱御頼被仰入候節、御申聞被成候二も一類中二も手前へ先代達二頼有之方も、跡二而ハ手前彼是助言申述、一円許容無之方も有之候、左候得者心尽候甲斐も無之候得とも、肥後守殿始何も共ニ存寄候而御頼之上からハ、無覆臆及候丈ケハ御相談可申候、又御幼年中ハ惣而御家老共之威自つから重く可成義二候間、兎角同役致和融申談候事肝要二而、諸役欠目之節人を吟味候二も鼻屑之沙汰二不及、万事平穩二成候様致候事第一二候由、被仰含候事も有之、此義ハ稻葉佐渡守様も被仰候程之義二候得ハ、諸役撰挙二おゐて別而入念候様可致と、伊深茂右衛門申二付、梁瀬三左衛門・西郷頼母義も同意二而、諸役と申内二も大御目付・御旗奉行以上ハ、格席之御取扱二も相成候義二候得者、是等之撰寄書を入御覧、其以下二而ハ町奉行・郡奉行・公事奉行之三役ハ、人之死生存亡ニ罹り候故甚重き役義二候間、是も其寄書を以相伺、其余ハ誰を申付候と為御知申達候迄二而取行、御看抱之御方へ区々ニ申上候様二而ハ如何二可有之、依而ハ豊前守様・佐渡守様御同前二相伺候而可然と、僉議相決候上、惣而御看抱へ相伺候御用之品々、大格吟味之上相極之、(『家世実紀』享保十六年十二月四日)

(2)「公儀向」の事項については、次のような例がある。

今日 敵有院様御法事 公方様上野御仏殿江御参詣被遊候二付供奉被遊候間、束帯二而辰刻以前御先へ御出被成候様二と前々日御老中様之御奉書有之、供奉之義初而之御事二付難有被思召、御大老堀田筑前守(正俊)様・御老中大久保加賀守(忠朝)様・戸田山城守(忠昌)様并牧野備後守(成貞)様御使者被遣候、尤今度初而之義二候故、於上野御勤方之義御差図被下度旨、御聞番を以、筑前守様へ被仰遣候処、加賀守様へ伺候様御差図二付、直二加賀守様へ御聞番致伺公同候得者御宿坊二而装束被成、御経堂へ御揃 公方様御装束等御聞合御水屋迄御出、阿部豊後守(正武)様へ御伺御差図次第御勤可被成由、(以下略)(『家世実紀』天和二年五月八日)

会津松平(保科)家は、溜之間詰である。数日ごとに江戸城に登城、老中と面談する機会があり、彼らから江戸城中の行事・政治について情報を得ている。この四代将軍家綱の法事の供奉については、「御看抱」を依頼している大老堀田正俊から指示を受けたうえで、「聞番」(他の大名家であるところの留守居役。服藤弘司『大名留守居の研究』一九七四

創文社を参照）を派遣、老中大久保忠朝に具体的な手順を聞いていたのが分かる。実際、享保期の「御看抱」へ助言を求める事項のうち、「公儀向」の事柄は、間番が伺うとするルールができた。

(3) 御看抱御用黒田豊前守様・稲葉佐渡守様・阿部豊前守様御三方へ御頼被成候処、公儀向き之儀者輕品定りたる儀者相伺候二不及、大立たる義計相伺可然と梁瀬三左衛門・西郷頼母致會議、其内御内証向之儀者前御代之通取計何卒御家之形不失様被成度、勿論 土津様以来之御政体を改候儀者決而不相成儀二候得者、大細事共二相伺候而ハ後々致し悪キ儀共可有之候間、御家法を以取行、其内難決事者相伺可然と之事二而、大意致一決候得共、伊深茂右衛門所存ハ、徳翁様御幼年之節稲葉丹後守様ハ御間柄故格別之御方二候得者規二不致、天和年中堀田筑前守様へ相伺候時之事共を大格二定置可然、又豊前守様二者此方御看抱被成候と申義、御老中様へ被御届二候上者、御内々と申義二無之、表向へ押頭候義二候、左候得者此以後公儀向之御手合、少も間違有之候ハ、御看抱之御不念二可相成候、尤御存知無之様二致置候而者御看抱御頼被成候詮も無之、畢竟御幼年故公儀向之儀を被為重候を以、御看抱も御頼被成候処、其御方江為御知不申候而者、悉皆御家老共之不調法二相成候義二候間、公儀向之御用ハ聊たり共先ハ申上候様いたし、其外御蔵入御用一式之儀、御勘定所填之御差図を以取行候義者格別、其儀二付御老中様方へ相伺候様成事歟又ハ重キ願等申上候節、是又豊前守様相伺不申候而者罷成間敷、全体豊前守様へ御看抱御頼被成御受合被成候間、御家へ之事万端御苦勞可被成義二候、御看抱之事他家二而も及承義二候得者、御家ニケ様々々之義有之由及御聞候哉坏と豊前守様へ脇々御尋も有之、其節御存知不被成、被仰候様二而ハ御心外二可有之左候而ハ御遺命之御頼を心儘二致候様相成候而已ならず、豊前守様を蔑如いたし候様二も思召候半歟、依而ハ是迄御取行之趣、同僚申談候上何事も其外細々之義者家法を以致吟味取計申二而可有之旨、豊前守様へ申上其段御承知有之様、兼而る取計可然と申二付、三左衛門始猶又申談候者、前御代御幼年筑前守様へ相伺候始末者、其節訳ケ有之たる義二も候哉、此度豊前守様事二相伺候段、御内外御繁用之義二候へハ、却而思召之程如何可有之、就而ハ豊前守様御用人迄も細々之事迄相伺候段者恐入候得とも、迺も御看抱被成下候義二候間、何事たり共可申付候、乍然御内外御用御取込被成候処、其段も憚入如何可然哉と、同僚とも一列了簡難決罷在候由、此段

御内意相究候様相願候ハ、必定此方へ所存御尋可有之候、其節ハ士分上之者と歟又独礼以上之義と歟差別を立可申上候、尤其以上たり共隠居・番代・跡式・元服・縁組・屋敷之願等、差定りたる義者御家法之通取行、其内ニも詔有之候事ハ格別ニ候得者、井口織部跡式之如きハ自ら相伺候筋候、諸士と申義ハ小番以上組外之士以上も可然哉且又野事ハ前御代御聞被遊候通、他邦へ追払以上之罪人者申上候様いたし可然候、惣而同僚共之取行ニ而御家中相服間敷義ハ勿論ニ候得とも、此節之義者権を取と不取と之両端に可有之、此義者一端之了簡ニ及兼候義ニ候、権を取候ため二者大御目付御旗奉行以上之事計相伺、其以下者同僚取計候歟、何辺他家之形も聞合候上、豊前守様之御内意を得可致決断候、尤其段相決候ハ、御家老若年寄も夫々之事ニ而相伺候外ニも、御用之所ニ寄奉行御用人も罷上り、公辺一通之御用者御聞番を以相伺可然と之旨ニ僉議致一決候、(『家世実紀』享保十六年十一月三日)

(4) 平松義郎『近世刑事訴訟法の研究』(一九六〇 創文社)二八八頁以下によると、幕府は、藩が御料人別の者に対して自分仕置を行うことを嫌い、幕府奉行所での裁判を命じている。他方、私領同士の引き合い事件については、交渉により柔軟に対応していたとする。会津領内の者が共犯であることから、御料の者についても一緒に会津の裁判に任せただろうが、御料の者に対する刑事裁判にも、例外が存在していることを示す。

また江戸初期には、犯人が仙台藩人別の場合、仙台に通告することなく処罰して事例もある。同様の事例は相馬藩にも存在する。このような取り扱いが、交渉により形成された慣例であるのかどうかは不明であるが、一六九八(元禄十一)年以前においては、仙台藩でも本国照会をせず処罰を行っていたから、刑事裁判における相互主義が妥当していたといえようか。



### 三 「御看抱」に関する問題点

#### 一 「御看抱之御方」と保科家

ここでの問題のひとつは、「御看抱」に依頼する幕閣と保科氏との関係である。

天和年間の「御看抱」三名のうち、稲葉正往は、一六六一（寛文元）年に正之の五女お石をもらっている。正往は「御間柄故格別之御方」であつたと、会津藩の重職者の間では認識されている<sup>1</sup>。また阿部正武も、先ほど引用した史料からわかるとおり、一六八二（天和二）年に娘のお竹が正容に嫁している。これに対し、堀田正俊は、保科氏との姻戚関係はみられず、「御看抱」関係を取り結ぶきっかけも、稲葉正往が京都所司代に転出する際に、正往が仲介したことであつた。

享保年間の「御看抱」三名について同様にみていくと、阿部正喬は、正武の嫡子である。また、稲葉正親も正往の直系である。これらは、天和期以来ずっと懇意な関係を保っている家の当主であるといえる。黒田直邦は、保科氏との特別の姻戚関係はみられない。「御看抱」は、姻戚関係（「御一類」）が基盤になつているものと、そうでないものとがあることが分かる。「御看抱」は、会津藩の立場に立つた助言を得るために依頼するものであるから、姻戚関係にあるものがそのような立場に立つのは当然であるとして、そのような関係にない堀田正俊、黒田直邦が「御看抱」になる場合、その位置づけはどのようなものになるのであろうか。

堀田正俊は、前述の通り稲葉正往が京都所司代に転ずる際に、そのかわりとして指名されたものである<sup>3</sup>。また、この際注意すべきことは、一六八三（天和三）年に阿部正武に「御看抱」を依頼する際（前述史料）に、それまで「御

説

論

看抱」をしてきた堀田正俊に代わって「御家政之御用」に関する助言をするようになることである。天和期における会津藩の「御看抱」は、少なくとも領内政治に関する限り、保科氏と姻戚関係にある幕閣によって担われるのが本来の姿であり、それ以外のは暫定的なものと考えられている。幕府の支配が、家関係を通じた支配から制度による支配に取って代るこの段階において、会津藩側の対応は、なおも家関係を梃子にしようとするものといえる。<sup>(4)</sup>

黒田直邦については、『家世実紀』に次のような記事がある。

(史料十二)

豊前守様ハ御側御用人二而、別而御心易被成候御方二候得ハ得御内意可然候、且又世間へ懸候義、此方内証之儀共二、会津へ言上仕而者間二不合事有之節、是又豊前守様へ得御内意可然候、此方内証之儀、先者豊前守様へ達候義有之間敷候得共、若も之用心二井上金右衛門相心得、御用人御書簡御聞番之三役二可申付置旨被仰出之、(『家世実紀』享保十六年四月十八日)

それ以降そのような場合には、当時奏者番兼寺社奉行であり、「別而御心易」くなっていた黒田直邦に助言を得るようになった。この後、直邦が九月に「御看抱」を依頼されるにあたっては、会津藩との信頼関係がポイントになっている。

以上から、「御看抱之御方」に選定されるのは、第一次的にはいわゆる「御一類」の中の人物であるが、すべてがそういうわけではなく、幕府情報を親切に提供してくれる者を選ぶ場合もあることがわかる。ここでは、前者を「家格系」看抱、後者を「非家格系」看抱と分類する。<sup>(5)</sup>

## II 「御看抱」の助言と幕藩関係

「御看抱」に助言を求める事柄のなかには、藩と幕府の利害が交錯する微妙な問題もあり、藩の主張が通るよう粘る藩重職の姿が垣間みえる。

天和三年八月二十日、財政逼迫のため、儉約についての法令が出された。それに至る過程で、会津藩重職の間では、將軍への贈答の中止をめぐつて、「御看抱」のうち誰に内諾を求めるのがよいのかが問題となっていた。

### （史料十二）

伊深茂右衛門・柳瀬三左衛門所存者、筑前様公儀同前二候得者内証議定不在事ハ難申上、殊二 御家督御相続間も無之、何故を以御逼迫と被仰達品難心得、御城中破損繕等も公儀役之様二成事二候間、（略）音信贈答を始諸事相省候得者、五千両程之御益二相見、民部并奉行共再忝申談、阿部豊後守様江御看抱御頼被成候得者、御内証御不如意之次第申上、其席二公儀江献上物をも五三年之間省不苦候ハ、世上之贈答ハ猶以相止、（略）殊二豊後守様ハ筑前守様ハ別而此方之御事御苦勞被成候義、如何程二申達候共不遠慮二思召候義ハ有之間敷、（略）稲葉丹後守様ハ御内証向之事御存知被成候御方二候故、有之忝二申上候得ハ、（以下略）

この記述からすると、家老たちにとって、堀田正俊は「公儀同前」であつて、忌憚なく藩内の窮状を訴えることのできる人物ではないと判断していることがわかる。それに比べ、阿部正武や稲葉正往は、会津藩の立場に立つた助言をしているという実績があり、藩内の事情にも通じているということで、堀田正俊よりは重い信頼を置いている。この時点において、会津藩重職の中では、「御看抱」を依頼している幕閣の中でも異なつた評価がなされている。

### （史料十三）

彌決着之上豊後守様江御難渋之越申上候得者、御家之儀古来方夫々御内所潤沢之様ニ沙汰有之、何故もなく被仰達候儀如何ニ候、頃日尾張・紀州両家ニ而進物贈答御断有之、是ハ旧冬類火ニ付公儀江被候達候、依而者先御内証被成程御詰被成、其上ニ而僉議有之様ニ御申聞被成候、(略)屹度贈答相止可然由僉議を決し、再び豊後守様へ申上候得共、御献上物并進物贈答者是迄之通、其外者僉議之通ニ而可然由御差図有之、則御省略被仰出候、

結局、阿部正武に内諾を得るべく訴えたのであるが、会津藩は「古来方夫々御内所潤沢」であると判断され、また会津側が拠りどころとしたと思われる尾紀両家の進物の中止も、類火に伴う措置であつて、歳出削減効果の増大をねらつたものは認めがたいという解答しか返つてこなかつた。これに対し、会津側はなおも粘り、再度阿部正武に贈答中止を訴えた。<sup>(6)</sup>しかし、彼を翻意させるには至らず、將軍への贈答中止を断念せざるを得なかつた。

### III 「御看抱」と「御頼」・「両敬」

「御看抱」を考えるうえで、もうひとつ考えなければならぬのは、「御頼」との関係である。服藤弘司氏によると、仙台藩では嗣子不在、家中騒動、財政危機など藩の非常事態を念頭に置いて、「御懇意の御方様」たる大名と日常的な交際をしているという。その中で、幕府重職者が含まれ、「御用御頼之方」と呼ばれている。<sup>(7)</sup>また、近年では、山本博文氏や松方冬子氏によつて、大名の日常的な交際が、実態として明らかにされている。そのなかで、藩と幕府や他家との関係の補佐とその見返りにより成り立つ関係として、「御用頼」が言及されている。<sup>(8)</sup>但し、松方氏の分析した岡山藩や金沢藩の場合、「御用頼」は旗本に対して使われている言葉である。また、松方氏は、大名同士の主に親・姻戚関係を元とした関係である「両敬」関係に言及し、両敬を結ぶ相手は老中を勤めるような譜代藩が多いとしてい

る。<sup>9)</sup>幕閣有力者との繋がりを大名達が求めることが多かったことが理由ではないかとしている。

本稿で問題とした、「御看抱」という概念は、日常的な交際を基盤としつつも、藩主幼少という特殊な状況のもとでのみ存在し、純粹に藩内行政に関することも含めて、有用な助言を得ることを直接の目的とした関係である。よって、「御頼」あるいは「両敬」の関係とは、この点において、意味合いを異にするものである。<sup>10)</sup>

「御看抱」が、いわゆる「御頼」の延長線上にあることは、容易に首肯できる。二度の「御看抱」依頼の時には、それ以前から、「公儀向」の事柄について相談していた幕閣が含まれる。前にも指摘したが、堀田正俊のように、特に「御頼」ではなかったとみられる者が、「御看抱之御方」になることもある。その場合にも、「御一類」であり、もつとも懇意にしていた奏者番稲葉正往の紹介が前提となる。また逆に、実力者の老中であり、「御用頼」であつたとみられる者でも、「御看抱之御方」からはずれる場合がある。

(史料十四)

公儀へ懸りたる品之内、若難取計義有之節者、左近将監様（筆者注―松平乗邑）御老中御勤役二而、御懇意二被成候間、得御内意御用番伺、又ハ不及同事者差図之通可取計候、水野祥岳老（元老中水野忠之）とハ違遠慮深き人二候間、品二依差図無之も難計候、依而左近将監様へ伺候義如何とあやふし候事有之（略）（『家世実紀』享保十六年四月十八日）

公儀に関係する事項のうち、難しい事柄については、当時懇意の老中松平乗邑の助言を得たうえ、月番老中に伺をたてていたのであるが、必ずしも会津藩の立場に立った助言が常に得られるのかどうか、危ぶむ声が会津藩内部にあったようだ。この危惧のために、奏者番黒田直邦が「御用頼」を担うようになる。姻戚関係に基づかない「御用頼」

が冷静にその貢献度を評価されていることのあらわれである。<sup>①</sup>また、前述したように、堀田正俊についても、必ずしも会津藩の立場に立った助言が得られていない、という不満が会津藩にみられる。幕政の中枢にいる者との交際が望まれたというのは、おそらくはその通りだろう。しかし、あまりに中心的な人物である場合、大局的な政治判断が先行し、個別利益的な関心から出た請願には応えられない、という事情があったかも知れない。「家格系」看抱の稲葉・阿部両氏は、良好な評価を与えられているが、「非家格系」看抱である堀田は、「御看抱之御方」としての適格性についてのシビアな評定を受けている。

以上のように、「御看抱」は、「御用頼」の延長線上にあるといつてよい。ただし、幼少藩主期に限定され、交際のある幕閣の中からピックアップされるという点で、特異な現象である。「御看抱」という言葉が使われるようになって以降、「御看抱」依頼が一定の要項により行われていることも、筆者が、この体制を単体で考察する意味を持つと考える理由のひとつである。

#### IV 「御看抱」の特殊性

権力基盤が強固でない状態における、幕閣の藩政に対する助言は、会津藩に限らず、他の藩にもありうると考えるのが自然である。実際に、藩主の元服を中心とした儀式や、そのほかさまざまな政策をめぐって幕府に働きかけるため、幕府重職者に仲介を頼むという事実がよく指摘される。しかし、罰事が助言依頼事項の一方の柱であるというのは、会津藩以外ではあまり例をみない。裁判は、幕藩制国家にとって直接施政の善悪に影響を与える重要事項であり、領主にとって強い関心のある事柄である、<sup>②</sup>というのが一応の説明としては妥当であろう。ただ、そればかりでは具体

的な刑事裁判について助言を求めた会津藩の特殊性を説明することはできない。

会津藩に特殊な事情を探してみると、南山地方にあった「私領並」預所がある。南山地方は、会津藩の預支配と、幕府の直支配が交錯するが、「御看抱」依頼はいずれも預支配の時期に当たると、この預所は、最初は施政に関して幕府の干渉をほとんど受けないものであった。服藤弘司氏によると、幕府は、享保年間の預所復活以降、預所統治に付与された特権を奪おうとする態度をとった。しかし、会津藩は「私領並」の特権の名目を保持することにこだわり、これに抵抗した。この結果、「私領並」という形は残ったものの、施政において幕府に準拠するようになった。南山預所をめぐる、幕府と会津藩とのやりとりのなかで、会津藩側が幕府の心証を良くする手段のひとつとして、刑事裁判を一方の柱とした老中・奏者番への助言依頼を行ったと解することができるかもしれない。とくに、一七〇〇（享保十五）年の南山騒動では、騒動の処理が事前に留守居廻状で伝わり、会津藩が情報を漏洩したのではないかと、この疑いを幕府は持った。結局、漏洩の事実はなかったという形で決着するが、会津藩としては、幕府の心証を回復する必要があったと考えられる。少なくとも享保の「御看抱」依頼は、このような幕藩間の緊張の中でとられた政策とも考えられる。

(1) 前述『家世実紀』享保十六年十一月三日

(2) 稲葉正往の妹は、堀田正俊に嫁しており、この二氏には姻戚関係がある。

(3) ただし、稲葉正往は「御看抱之御方」を降りたわけではなく、必要に応じて「御看抱」依頼を受けている。

(4) 「御看抱」の目的のひとつが、幕府から派遣される国目付への対策にあることは、容易に想像がつくところである。朝尾直弘氏は、寛永期の国目付が族縁的関係を「公儀」の「奉行所」の役人である將軍近臣の監察によって補完させたと

し、やがて比重が逆転して後者が前者に取って代わるとする。「將軍政治の権力構造」(『岩波講座日本歴史一〇』岩波書店、一九七五に所収)を参照。また、堀田正俊は、「御看抱」依頼の直後に大老になっており、領内の政治にわたる個別的な助言関係を取り結ぶには、あまりに大物であつたこともあるかもしれない。

- (5) 松方冬子「近世中・後期大名社会の構造」(宮崎勝美・吉田伸之編『武家屋敷 空間と社会』山川出版社 一九九四年所収)によると、岡山藩池田家の「通路」には、家格系と役職系の二系統があるという。「御看抱」の場合、全員が幕府の中で老中、あるいは奏者番という役職を持つている。しかし、前述の通り、「御看抱」になる要因には、姻戚関係が絡むものとそうでないものの二つがある。「御看抱之御方」のうち、稲葉・阿部両氏を「家格系」、堀田正俊、黒田直邦を「非家格系」と把握することが可能である。

- (6) それは、波及効果も含めて贈答の一律中止がもたらす歳出削減が、年間五千両にものぼるからであつた。

- (7) 服藤弘司「他藩との交際」(『大名留守居の研究』本論 第五章第一款 創文社 一九八三年)

- (8) 山本博文『江戸城の宮廷政治』(読売新聞社 一九九三年)、前掲松方「近世中・後期大名社会の構造」を参照。松方論文によると、加賀藩前田家が他家と「通路」関係を結ぶきっかけのひとつとして、出入・御用頼といった、幕府・他家との関係の補佐とその見返りによって成り立つ関係がある、という。

- (10) 『家世実紀』では日常的な助言関係に特定の概念を用いていない。しかし、会津藩においては、後述するように特定の幕閣に「公儀向」の事柄についてあらかじめ内意、及び差図を受けていたのは事実である。こういった現象に「御頼」というレッテルを貼つても差し支えないと考える。また、内意を受けたり、助言をもらう場合「御頼」という言葉が使われることがある。これは「御看抱」を頼む場合にも、そうでない場合にも使われており、より包括的な概念であるといつてよい。

- (11) 水野忠之と会津藩との関係は一七二一(享保六)年の南山騒動の事件処理において、会津藩が忠之からの指示を受けたことに始まる。



また、本稿の趣旨からそれるが、水野忠之と松平乗邑とが、人間類型に对照的であると考えられている点も興味深い。時期的に前後するが、両者とも勝手掛老中に就任しており、当時の吉宗政権の中心的存在であった。水野は清廉で、古武士的な性格であったとされている。そのいっぽう、くだけたところがあつたともいわれ、この点で松平乗邑と異なっていたと思われる。

(12) 服藤弘司『刑事法と民事法 幕藩体制国家の法と権力Ⅳ』（創文社、一九八三年）九頁

## 四 まとめ

大名どうしが日常的に交際する場合、その背後には、幕府の情報を入手するという目的を含んでいることが多い。よって交際の相手も、幕府の重職、あるいはそれに近い人物が好まれる。また、交際の内容が、単なる儀礼、問い合わせにとどまらず、領地内の政治に対する助言・指導を含む場合、領内政治の基調は、「幕政志向型」となることも、認めてよいだろう。

今回紹介した、会津藩の「御看抱」関係は、すべてが老中、あるいは奏者番との間のものである。「御看抱」とは、領内の政治の重要事項に対し、助言を求めることである。よって、この時期の会津藩の政治は、「幕政志向」型であると考えられる。また、「御看抱」関係は、単なる交際ではなく、「公儀向」及び藩政に関する重要事項について、助言を求める関係である。この点において、「幕政志向」性は、より直接的であるといつてよい。

また、看抱として助言をする「御看抱之御方」は「家格系」と「非家格系」の二つの類型に分けることができる。「家格系」の「御看抱之御方」は、全般に「御看抱」としての働きを好意的に評価されているのに対し、「非家格系」

説の「御看抱之御方」は、かなりクールな評価がなされている。

## 論

### Ⅰ 「御看抱」の意義

会津藩にとって、「御看抱」関係の意義は対幕府政策として側面と藩内部向けの側面が考えられるが、主たる側面は対幕府政策としてのそれである。

法制及び裁判の面からみた意義としては、幕府の、とくに刑事裁判に対する考え方が会津領内へ浸透したことが挙げられる。前述したように、「御看抱」関係は、「幕政志向」が強い時期においてみられる関係であるといつてよい。とくに、刑事裁判に関して幕府における同種の事例の取扱が「御看抱之御方」から教示されていることから、いわば「刑事裁判の幕府法準拠化」を「御看抱」関係の結果のひとつとして指摘できる。従来の研究においては、主に法典の制定過程や、条文の「公事方御定書」や明律との比較によつて、幕府（あるいは幕府法）の影響を問題にすることが多かった。しかし、実際の裁判過程において、藩と幕府の裁判担当役人との間で、やりとりされる問い合わせとその回答を、数多く見ることができる。<sup>(1)</sup> 裁判をめぐる、幕府と藩は連絡をとるチャンネルを、あらかじめもっている。また、本稿において明らかにしたように、「他領引合」の裁判ではない、「自分仕置」の範囲内の裁判においても、ある条件の下においては、幕府重職者の助言により、刑事裁判が行われる。刑事事件処理における、幕府と藩との関係を考察するうえで、裁判過程における幕閣の教示、助言という要素を加えて考える必要があると思われる。<sup>(2)</sup>

また、特に天和期の「御看抱」については、対幕府対策の側面が強い。幕府としては、戦略上重要な地点を、幼少の者に守らせるのは都合が悪いと考えていた。<sup>(3)</sup> 会津藩は、東北の外様大名、とりわけ伊達氏ににらみをきかせるため

の幕府側の戦略拠点である。<sup>(4)</sup>つまり、会津藩にとって、幼少の子を残して藩主が死亡することは、改易はともかく、他の地への転封の可能性をはらむ一つの危機であったと考えられる。かりに、幼少の子に遺領相続が認められたとしても、前述のように国目付が派遣され、藩政が観察され、そこで何か不都合があった場合、戦略上の要衝であるが故に、幕府から何らかのリアクションがかえってくる可能性がある。幕府の改易・転封件数も、寛文・延宝期の安定傾向から、綱吉將軍期の天和年間には再び増加し、徳川一門大名に対しても、「越後騒動」に伴う越後高田藩主松平光長の改易にみられるように、厳しいものがあつた。<sup>(5)</sup>

天和期は、このように徳川一門大名にとつて、あまり安閑としていられない時代であり、幼少者に遺領を相続させなければならぬ会津藩も、自藩の安泰のために、幕府政策の積極的取り入れが必要である、と考えたと推測される。また、会津藩には、陸奥と越後に二ヶ所の預所がある。これはいわゆる「私領並預所」という特殊なものであり、それを守ることも課題の一つであつた。ただ、注意を要するのは、「御看抱」関係締結は、藩側の自律的な判断によつて結ばれることである。藩は、単に幕府の政策意思を、自藩に取り入れるだけにとどまらない。幕府に対して藩の主張を貫徹させるための梃子として働かせようとした、と理解できる。

藩内部の問題として考えると、幼少藩主という「第一人者」不在の状況<sup>(6)</sup>を、幕閣の助言によつて権威を補完するために、「御看抱」という形態がとられたのではないか、と考えられる。もしそうだとすれば、藩主権威が弱体である時期には、幕府権威を頼みとして藩政が展開され、「幕府志向」型となることになる。<sup>(7)</sup>そこで、天和・享保以外の幼少藩主期における、藩政のサポート体制を検討することにする。

## 説

## II 「御看抱」と「御添心」

## 論

一七五三（寛延三）年、藩主が保科容頌になった。このときは、老中・奏者番クラスの名大への「御看抱」の依頼はなく、容頌の叔父、容章（靱負佐）が藩政全般について後見的役割を果たしている。容章は、後見的役割を依頼された際、「御看抱」という名目を、再三辞退している。<sup>(8)</sup>

堀田相模守正亮、稲葉丹後守正弘、阿部飛騨守正因といった老中や姻戚関係のある大名へは、「御看抱」よりは一歩うしろに引いた形での支援を要請している。『家世実紀』上では「御頼」あるいは「被添御心」、「御添心」といった表現になっている。

これに先立って、江戸詰家老伊深茂右衛門から、老中堀田正亮の用人へ内々に問い合わせたところ、「靱負佐様被成御座候得者、御看抱無之可相済」という答えが返ってきた。

## （史料十五）

『家世実紀』寛延三年十一月二日。

亀五郎様御幼年二付而者、御先代御幼年之形を以、御看抱御頼之御方無之ハ相成間敷哉、靱負佐様被成御座候へハ、夫二も及間敷哉、且御国目付等之儀公辺御振合も可有之と、江戸詰合伊深茂右衛門儀、御聞番高木縫殿右衛門を以堀田相模守様江相窺可然と、彼方御用人へ内証為承合候処、靱負佐様被成御座候得者、御看抱無之可相済、尤御看抱御内々御頼之事故、御先格之通公辺御届二も相及間敷、且靱負佐様為御仕置日数御暇二而会津へ御下被成候とも、御国目付衆不被遣儀ハ外々へも可相障、一同御願之儀御無用二而可然旨、御挨拶之由委曲御聞番申出候二付、御先代被仰置候趣を以、御頼被仰入可然御方々共二吟味相尋候上、御頼之草案をも差出候二付、猶評議之上相模守様へ、肥

後守病中申置候者、嫡子亀五郎未幼年之義二御座候故、別而無心元候、同姓 靱負佐罷在候得共、年若之儀二候得ハ無覺束候、兼而御懇意被成下候儀二候得者、此末 亀五郎儀別而被添御心被下候様仕度奉願候旨、別而亀五郎申達候、此趣家老共申付置候処、長髪二罷在候故、今日まで為差扣候、肥後守申置候通、已来何分二も被為添御心被下候様仕度奉願候、依之家老之者を以申上候旨、松平加賀守様へハ肥後守病中申置候、 亀五郎儀幼年二候故別而無心元候、靱負佐罷在候儀二候得とも、已来猶以被添御心被下候様頼入候、此趣病中申付置候処、長髪二罷在候故今日迄延引仕候、此段宜申上候様二と 亀五郎申付候、且又酒井左衛門尉殿へも御頼申置候趣、以使者申入可然候得共、差付申置候段も如何二候間、此様填宜被仰通被下度旨、稲葉丹後守様・阿部飛驒守様江ハ、肥後守病中申置候、 亀五郎幼年二候故別而無心元候、靱負佐罷在候儀二候得とも、何分二も被添御心被下候様頼入候旨、松平讃岐守様へハ御間柄申、別而被添御心被下候様奉願候旨、井伊掃部頭様・同備中守様へハ、肥後守病中申置候、 亀五郎儀幼年二候故別而無心元候、拙者同然被添御心被下候様頼入候、且 亀五郎申達候、肥後守申置候通、此以後何分二も被添御心被下度候、此段宜申上旨、酒井雅楽頭様へハ、肥後守病中申置候、 亀五郎儀幼年之儀二候故別而無心元候、靱負佐罷在候得共、年若之儀其上広付候儀ハ不弁之儀二候へハ、万端被添御心被下候様頼入候旨、別而 亀五郎も肥後守申置候通、此以後何分二も被為添御心被下度候、家来之者を以御内談申上候儀も可有之候、別段二御懇意被成下、被御心付候儀も候ハ、無遠慮御助言も被成被下候様奉願候、此段宜申上度旨是又申付候旨、御使茂右衛門相勤、其外二黒田大和守・保科越中守様二ハ、御参府後御屋敷へ御出之節御頼被仰置候旨申述、大岡出雲守様へハ御聞番を以御頼被仰入可然哉二候得とも、此度ハ一体御聞番案内二而茂右衛門相勤可然と相談いたし、 亀五郎様 靱負佐様へ申上、今日と四日五日と御使相勤、相模守様二者御逢之上御直答被成、其外様ハ御直使者を以御挨拶有之、且又相模守様江者 靱負佐様も御直二御出、

説 御逢之上 亀五郎様御義御頼被成進之、

論

「公辺江相懸り候儀者勿論、其外賞罰之者とも重儀者堀田相模守様江御相談も被遊候形」であつたという記事もあるが、その後の藩政関係の記事をみる限り、容章が直接の後見役を務めている。刑事裁判に関して助言を求める場合の取扱について、『家世実紀』宝暦元年正月の記事がある。ここでは、容章が、前代までの「御看抱之御方」に対応する存在であると考えられている。この段階では、幕閣の側から、藩政に深く関わり、なおかつ煩雑な「御看抱」を避けようとする姿勢が見える。

「御看抱」関係は、天和、享保の二度のみであり、その後二度の幼少藩主期においては、藩主の近親者、あるいは家老経験者が藩政の後見を務めている。他の大名には、「御頼」「御添心」という形で、バックアップを頼んでいる。天和・享保Ⅱ「御看抱」から寛延・文化Ⅱ「御添心」へ、という変化の図式が浮かび上がってくる。<sup>(9)</sup>

本稿においては、専ら対幕府関係において助力を求める点で、「御看抱」と区別するため、寛延、文化の二つの藩主交代期における会津藩主と他大名との助言関係を、仮に「添心」という名で表すことにする。

それでは天和、享保における二度の「御看抱」関係のもとの政治は、のちに、どのように評価されたのであろうか。一八〇五（文化二）年七月二十九日、藩主保科容頌が死去した。後継の藩主には保科容詮（容頌の養子）の子容往がついた。容往は当時二十八歳であつた。しかし、彼は病弱であり、会津藩は、万一の場合、その子供金之助（後の七代藩主容衆）に藩主を継がせる準備をしていた。金之助はそのとき三歳であつた。しかし、このときは「重立候事」について、白河藩主松平越中守定信に、「御添心」を依頼することにした。

（史料十六）

先々代幼年之節ハ黒田豊前守・稲葉丹後守様・阿部豊後守様江相頼候形二候、併其節ハ政事向相談評議手間取候由申伝候儀も有之候（以下略）

土常様（容貞）御幼年之内、御看抱之御方御頼有之事二相窺取計候事之様二相見、左候而者御政事向却而致悪敷儀可有之哉、此度之儀者屹度御看抱と御頼不被成、兼々越中守様二者 殿様御噂是迄御親切二彼是御世話被成進、殊二御同席御隣国之事二候条、金之助様御幼年中諸事御添心御頼被成、公辺懸り重御用并御政務筋重事ハ、相伺取計候様御家老共へ被仰聞候趣二取組、御存生之内二御頼被仰入候方可然と致決断（以下略）（『家世実紀』文化二年十二月廿三日）

享保の「御看抱」においては、家老の評議の結果を「御看抱之御方」に諮問し、回答を得るという方式が取られた。しかし、「御看抱」が家臣の人事や裁判など広範な内容を含むうえ、江戸との連絡等で手間取ることが嫌われたのであろう。文化年間の段階においては、「御看抱」関係は、煩雑であるとして、積極的な評価はされていない。そこで、諮問先を松平定信にしぼって、助言をしてくれるよう、依頼した。<sup>10)</sup>

文化年間の藩政担当者には、「御看抱」はあまり評判が良くないようである。前述したように、会津と江戸の間を、諮問と答申が往復するのは煩雑だと考えられていた。加えて「御看抱之御方」相互の間で諮問がたらい回しになることもあった。また、公儀向きのことはともかく、藩内の行政事項に幕閣が口を出すというのも、嫌われた一因であったかもしれない。しかし、会津藩は、徳川一門であるにもかかわらず、死去した藩主の葬儀を神道式で行うなど、幕府との間で微妙な問題も少なくなかった。藩主が交代した直後の幼少藩主期の不安定さが、藩の滅亡に結びつくという不安を、天和及び享保期の会津藩重職がもったとしても、さして不自然ではない。藩主交代期においては、幕府か

ら国目付が派遣され、藩政を監察することもあり、それへの対策としても、幕府重職との連絡が必要であった。「自分仕置」の範囲内である、藩政機構の人事や、領内の裁判について、幕閣の助言、指示を求めるのも、やむを得ないことであつたかも知れない。幕閣による「御看抱」という体制がとられた背景は、当時の藩重職がもっていた、対幕府関係への強い不安である、といえなくもない。逆に、寛延以降の会津藩には、この手の不安はそれほど強くなく、藩政の後見役になるのは、藩主の一門や、家老経験者でかまわなかつた、ともいえる。南山預所の統治も、先例が蓄積された時点においては、幕府との連絡の煩雑さがかえって障害になつたのだろう。また、幕府重職者と関係を取り結ぶ目的のひとつは手伝普請など、幕府から課される多額の負担を回避できるのではないか、という期待である。<sup>1)</sup>しかし、一七三三(享保十三)年に江戸城の堀浚いが命ぜられ、約四万両もの出費を強いられた。享保の「御看抱」体制は、この面においてはあまり功を奏さなかつたといえる。

一七九〇(寛政二)年、会津藩の刑法典である「刑則」が制定された。「刑則」は、熊本藩の「御刑法草書」の影響が強く、明律系の刑法典の一つに数えられる。したがつて、会津藩の刑事裁判は、それ以降、幕府刑政とは異なつた体系の法によりつつ行われることになる。そこに幕閣の指示、助言をもつてきても、うまく行かない可能性が強い。この時点において「御看抱」に対する評価の低下は決定的である。<sup>12)</sup>

さらに、家老田中玄宰は、「刑則」制定のときに中心的な役割を果たしているが、彼が文化年間以降の政治を監督するといふのも、会津藩政が独自色を強める、ということの一つのあらわれである、といえる。「御看抱」から「添心」への移行の背景の一つとして、会津藩政の「幕政志向」形から「独自性追求」形への展開がある、と理解することも可能である。



(この論文は、一九九五年五月十三日に、東北大学において開催された法制史学会総会でおこなった報告の一部をもとに執筆したものである。またこの研究は平成八年度科学研究費補助金(特別研究員奨励費)によるものである。)

- (1) 前掲平松『近世刑事訴訟法の研究』においては、このような問い合わせ、それに対する教示が引用されている。
- (2) もちろん、今回指摘した事実は、私的な関係を基礎にしたものであり、幕府が公式に藩の裁判に介入したものではない。しかし、私的な行為であっても、幕府の重職である者が、他藩の裁判の結果に対し、幕府裁判における取扱を引き合いに出して助言を与えるということは、その藩の刑政に対し、何らかの影響を与えると考えて間違いない。

(3) 山本博文『寛永時代』(吉川弘文館 一九八九) 一四〇頁参照

(4) たとえば、寛文期のいわゆる「伊達騒動」のときは、仙台に間者を送り込み、情報をとっている。

(5) 藤野保『新訂幕藩体制史の研究』(吉川弘文館 一九七五) 五六八頁以下

(6) 朝尾直弘氏は家綱將軍期の「公儀」権力を、「第一人者」不在の「公儀」と表現した。('將軍政治の権力構造' (『岩波講座日本歴史一〇』一九七五、岩波書店) 三四頁)

(7) 容頌藩主幼年期の政治は「年寄共談之上相極候事二候得ハ先例を以致候外有之間敷」であるとされている(『家世実紀』第七卷四〇八頁)。幼年藩主期の政治は、先例がより重い意味を持っている。

(8) 御幼年二被為在候二付御看抱之儀御家老共評議之上、堀田相模守様へ御内意相伺候処、  
御負佐様被成御座候上ハ、他へ御抱看御頼被成候二も及間敷旨被仰候二付、其段相伺候上 御負佐様へ御頼之儀申上候得ハ、御看抱と申義者幾重二も預御用捨度由彼是被仰候処、公儀江御届も無之、外二御看抱御頼と申二而者、御家中一統如何二も可存候、席附候儀其外二も品二より酒井雅楽頭様へ御相談も可被成、尤御家老共も此後者猶以幾重二も申談御苦勞二不奉懸様可仕旨、神文を以申上候処、漸御聞濟被成候、仍而御幼年之御事二候間、御用向之義御負佐様へ御相談被遊候筈二候旨、大御目付御旗奉行以上江申渡之、(『家世実紀』寛延三年十一月十五日「御負佐様江御用向御相談御頼之儀被仰入」)

(9) 徳田浩淳編『史料宇都宮藩史』八九頁以下によると、一八〇五(文化二)年戸田忠延襲封後、將軍との対面に際して、「御頼ミノ御心添」を太田備後守、青山大藏大輔、京極周防守の三人に依頼している。

(10) 結局、定信は依頼を断り、藩内政治については、家老田中玄宰が藩主の「輔佐」となつて進められることになった。

三郎兵衛儀今日御前へ被召出、御書付を以先年御大老職被仰付候節、万事可奉補助旨被仰付置候処、此度代替二而耳目も改候節と申、我等末年若之儀二候へハ、猶以万事可致補助旨被仰渡之、(『家世実紀』文化二年閏八月廿八日)

(11) 文化の藩主交替の時は、他家の同種の例を参考に、嗣子金之助と公儀からの縁組を模索するべきではないか、との意見もあつた。理由としては、手伝普請等、多大な出費を強いられるような事態が避けられるのではないか、との期待が挙げられている。

(略) 且御家之義、公儀御統柄御連々敷被為成候御事二候処、御幼年之 金之助様御家督御乗出迄者御間有之事二而、何敷御役被為蒙仰候儀も可有之哉、既二享保十八年御堀浚御手伝被仰付候御例も候得者、長キ間二者此体之義有間敷共不被申候、左候得者此上御内証之御統方も乍不存事御難渋之儀相察候、依而者如此御物入等無之様、御浚方之御計專一之儀二候得共、只今之体二而者中々御除道無覚束候、就而者 金之助様へ公儀方之御縁組御手入有之可然、左候ハ、此末御家御勢之御為二も相成、且万一御用向被仰付候共、後々御拝借等之手筋も宜有之、既二仙台様御幼年二候得共、是迄如此御用被仰付候御沙汰無之者、御縁組之御訳柄二も可有之哉、公儀御縁組之儀者御物入彌増候事之由二而、紀州様等二而者甚御難渋之事二相聞候得者、先御乗出迄二御除道且鶏口牛後之譬も有之候事二而、御家後々之御勢二相成候事二候間、此上如何様致難渋候とも、御譜代恩顧之御家来一統患者存間敷、若並々之御縁組等二相成候ハ、御内証御甘二者可相成候得共、御難渋之只今此上之御難渋二可至も難計、御不諱二候ハ、不遠御国目付も可参事二而、御幼年中世上之被禦慢候御為二も相可成御家老中是迄之御心得二御居被成候而者、意外二臍を噛ミ候之悔も可有之哉と、愚意之趣不顧不遜内々申上候由紙面二調、武川源助方へ差出之、

(『家世実紀』文化二年十二月廿三日「物頭片岑保助義、御家御手厚之存寄申出、」)

ちなみに、容衆には、一八二一（文政四）年二月二十三日に將軍家斉の十五女幸子が嫁してきている。

(12) ただし、当然のことながら、幕府法を無視した刑政をおこなう意思があったわけではなく、当時の藩の重職者の中には幕府刑政を意識した発言も見られる。この点について、高塩博「会津藩「刑則」の制定をめぐる」(国学院大学日本文化研究所研究紀要七十一)を参照のこと。また、刑則制定以後にも、死刑の執行方法について、幕府のそれに準拠するようにせよとの法令が出されたりしている。

公儀二において死罪已上罪之輕重を以段々被仰付方有之候処、其者揚屋并牢内二而致死去候者共ハ、如何被仰付候哉委數承合、此方二而此体之義有之候ハ、公儀之御取計二基取計候様被仰出、依而公辺之様子町御奉行与力三村吉兵衛二間合之上、公事奉行存寄を以仕法申出候ハ、磔刑之儀、其死骸公儀二而ハ塩漬二致刑法二被行、欠所存命之通二相見、此段御家之御仕置と同様二有之、火罪之義、其死骸公儀二而ハ取捨、欠所如常相見、御家二而ハ是迄致牢死候とも死骸火焙、妻子家財欠所可被仰付候処、公儀同様之御取計二被仰付候ハ、死骸火焙を相止取捨被仰付可然哉、併取捨与申ハ死骸を野外へ捨、鳥獸之餌二成候とも不構事之由二候、会津之刑法場者地面狭候間、北青木村領分二糺掛之死骸飯二埋置候場所へ取捨可然歟、是以其最寄者田畑二候間、取捨之儘二差置候而者自然与狼之類集来候様二相成、田畑作物之障二相成可申候得者、取捨之唱二而狼犬等之煩無之様埋置、欠所之儀者是迄之通被成、罪銘札市中二三日建置候様被仰付可然、且又死骸取捨之場、薬師堂河原二而も可然哉二候得とも、此場所迺も地墨無之上、往還之最寄二而、或者野先御出も有之、尤田畑へ農民老弱となく日々罷出、自他往来之者不絶有之場所二候処、公儀御刑法場小塚原鈴ヶ森之様二成候而者、狼之患計二無之、里犬とても自然と往来之人二喰付候様二相成、一体難儀仕候事二可有之候間、仮埋場へ取捨之姿二而前二顯候通被成替可然、獄門之義、公儀二而者死骸取捨欠所、且獄門杯二可相成者之内二も、品二より死骸塩詰之上被行候例も有之候処、此刑御家之御仕置二較候而者刎首誅伐梟首二可相当候、然処公儀二而も獄門二可相成者之死骸、品二寄塩詰之上被行候儀も有之候得者、是迄誅伐梟首之内重き事跡之者ハ、欠所之儀とも二被行来候間、此段不残相止候而者差支二可相成、死骸之首梟首并欠所共二存命之通被行候様御居被置、其余事跡輕キ方二而死骸梟首二被行

説

論

来候義を被相止取捨被仰付、罪銘札建候儀前二同様被成可然、公儀二而死罪申刑有之、是二当候者病死候時も死骸取捨相成候処、此死罪と申者御家二而刎首と申刑二相当可申候、依而ハ刎首之刑之者病死仕候ハ、死骸刎首二被行来候処を被相止、是又取捨二いたし可然由、件々之趣申出候二付、加判之者評議之上、及言上候処、伺之通取計候様被仰出之、  
〔『家世実紀』享和三年正月二十一日「公儀之趣二基、刑法可取計」〕